

## 研究発表：自然の恵みを楽しむ環境教育

北海道夕張郡由仁町立由仁小学校 大垣内 四郎

### 趣旨

環境教育の基となったのは、1977年、旧グルジア共和国で開催された「環境教育政府間会議（トビリシ会議）」で採択された『トビリシ宣言』と言われるが、その宣言の中に【5つの目標段階】という項目がある。

【5つの目標段階】は、(1)気づき：環境全般とそれに関連する問題に対する自覚と感受性を習得することを援助する。(2)知識：環境とそれに関連する問題についてのさまざまな経験と基本的な理解を獲得することを援助する。(3)態度：(略)(4)技能：(略)(5)参加：(略)である。

また、『環境教育指導資料』（文部省平成3年6月）の「環境教育の基本的考え方」の(2)には、「幼児期、児童期においては、自然とのふれあいの機会を多く持たせ、子どものみずみずしい感受性を刺激し、様々な発見の中から好奇心を育て、創造力育成の基礎をつくる必要がある」としている。

基調となるこれらのことから、小学校段階では、【5つの目標段階】の(1),(2)の教育に当たることになり、地元環境を教材と考えるのが妥当であろう。

環境教育では他の分野より以上に、「その町」「その町の自然・文化・暮らし・人」など“地域”が大きく関わることを意識しなければならない。

これらの考えから、本報告では、『地域の恵みを楽しむ環境教育』と題し、行政特に町長のタウンビジョン、学校職員の地道な活動が町おこしに、学校における環境教育の実践例、を示しながら、環境教育の推進・充実にあたる校長の在り方を探っていこうと考える。

### 研究の概要

#### 1 地域の実態

空知地方は札幌市の東方北海道のほぼ中央に位置している。農業が主産業で、北海道最大の米作地帯である。

その昔は、石炭産業で隆盛を極めた。

現在、旧産炭地は夕張に代表されるように、農業（夕張メロン）や観光にその活路を見出だしている。

元来農産地であった本町のような所でも、減反政策など厳しい現実があり、「健康野菜」「生産者の顔が見える農産品」などと表現される営農改善を図るといふ、考える農業を進めている。校下にはエコファーマー（北海道認定農業士）など、考える農業を進める人材がおり、総合的な学習の時間を中心に外部からの教育活動支援がある。

当地域における“工”から“農”への回帰指向は、そのこと自体が環境教育のステージであるといえる。

#### 2 北海道・空知における環境教育

##### (1) 北海道

北海道は、豊かな自然が大きく広がっている。この環境を維持・確保していくことは、道民の使命であると捉え、道では、このような意識や関心を日常的な行動につなげるため、「出前環境教室」「環境アドバイザー」「環境学習地域リーダー研修会」「地域学習フォーラム」「エコ・モニター」などの事業や制度を展開している。

北海道教育委員会では、平成4年に「環境教育指導資料」の発行、同5年には「環境教育研修講座」、同6年から「環境教育指定校事業」を開始した。また、「環境教育研究協議会」を開催し、学校における環境教育の具体的な推進について協議を行なっている。

##### (2) 空知

空知教育研究所では、平成7年より2年をかけて「環境に働きかける教育の在り方」を研究主題とする研究が行なわれ、研究紀要としてまとめている。

空知教育局では、平成8年度指導資料「空知管内小中学校教育推進のために」の中に、「環境教育」と項を起こして取り上げている。

学校では、道教委の「環境教育研究指定校」や「環境教育実践校」に、また北海道から「環境教育モデル校」の指定を受け、それぞれ、研究実践が行なわれている。

今回は、南空知の町（行政）、地域、学校の取り組みや実践を報告する。

## 町長のタウンビジョン - 由仁町

本町の町長斎藤外氏は、『ガーデニングでまちづくり～庭園国家日本への道～』（中央公論新書）の中で、「都市と農村の共生・交流」と題して次のように述べている。

北海道由仁町、その位置は札幌に車で1時間、新千歳空港まで30分という、都市圏にあるばかりでなく空港を介して全国に開かれています。大都市に隣接している農村地帯だということです。

これらのことから、町政の基本を、「都市や空港に近い田舎づくり」に置くこととしました。「田舎者」とか「田舎暮らし」という言葉は、近代化の名を借りた都市化や人間性を疎外した街づくりが生み出したものではないでしょうか。

私たちはあえて声を大にして、「田舎づくり」に徹しようと思ったのです。

### 「田舎づくり」その1 - ゆにガーデン

まちづくり基本理念実行策として、ハーブガーデンづくりに取り組むことにしました。

ハーブは、食品はもとより、癒しによる健康、治療の活用が考えられ、農家にとっての作物だからといって農村に特化されているものではなく、都市に生活する人々にとってもきわめて興味深いものです。

敷地面積 1.4 ha 総工費 4.0 億円 日本随一

### 「田舎づくり」その2 - 優良田園住宅

「優良田園住宅の建設の促進に関する法律」が施行され、札幌在住のある方からの、「500坪程度の家庭菜園ができる住宅地を確保したい」という願いが叶えられるようになりました。

田園ならではの生活を希望する人が多く出てきたことは、スローな生活を求めようとする一つの現れと見ることができるのではないのでしょうか。

町は、平成15年に国土交通省の「手作りふるさと賞」（地域の個性、魅力の創出自治体）を受賞している。

町長のタウンビジョンから分かるように、街（地域）そのものが環境教育の教材園といえる。特に、ゆにガーデンは児童はもとより、地域の方々の学習の場となっているが、この構想の推進役でもある井上幸子園長から、次のようなお話をうかがった。

英国風庭園として生まれた「ゆにガーデン」は、中央の芝生の緑で癒し、ハーブの香りで癒していただけの新しい形のガーデンです。「地球上の生物は、すべての植物に依存して生きている」という英国国立K E

Wガーデンの理念をもとに、このゆにガーデンを育てていきます。

小さな子どもの頃の匂いは、想像力と、学ぼうとする意欲を刺激し感覚を鋭くします。植物の香りを利用して教育の効果を上げるには、ゆにガーデンが適しています。

## オオムラサキに会える町 - 栗山町

栗山町のあちこちで、国蝶オオムラサキの図柄を目にすることができる。こうなるまでには、ある学校事務職員の地道な取り組みがあった。高橋慎氏 栗山オオムラサキの会。彼の足跡を新聞の記事からたどってみる。

今では、100ha「ハサンベツ里山計画」にまで発展している。

『おもしろ昆虫感察記』（毎日新聞 03年10月18日）

85年当時、栗山町では教育委員会が「北海道の自然や地域に棲む生き物たちの姿の教材化しよう」と、理科の郷土副読本づくりに取り組んでいました。動物編の一端を担当することになった私と久保さんは、休みの日となると町内の野山や川原を歩き回り、チョウを調査しデータ化しました。3ヵ月でその数は50種を超えました。7月も下旬になった頃、御大師山の山頂付近で、シナノキの周りを群舞するオオムラサキに出会いました。その後、幼虫の食樹であるエゾエノキを探し回りましたが、沢の急斜面にへばりつくように立っている樹齢70～80年の1本しか見つかりませんでした。1本という事実が、オオムラサキの保護と雑木林の育成という“森づくり運動”に発展しました。

翌年、栗山オオムラサキの会が発足し、それ以降現在まで、自然と共生する栗山の街づくりを担い続けてきています。いま、御大師山に続くハサンベツ地区に100haの雑木林を確保し、大勢の町民が手弁当で森づくりを進めています。

## 町民による『ハサンベツ里山計画』（趣意書より）

かつて、周りが雑木林で囲まれ、水田であったハサンベツ地区を、自然と農業と人とが共生する里山、ふるさとの川として再生、創出していくことをめざし動きだしました。

御大師山で昭和60年、「国蝶オオムラサキ」の生息が確認されてから、その保護などの地道な活動が多く町民に受け入れられ、生き物たちを保護する活動や、様々な自然活動が盛んになり、栗山オオムラサキの会、栗山植物観察会、御大師山を愛する会、おっ鳥

クラブ、栗山ホテルの会、栗山ウォーターリフォーム会など、自然活動団体の活動が活発になっています。平成元年に、御大師山一帯が環境庁の「ふるさといきものふれあいの里」に指定されて以来、「ファープルの森」「ふれあいプラザ」「ファープルの森観察飼育舎」などとして実動化されています。それらを効率のよい活動とするために、『栗山町八サンベツ里山計画実行委員会』を組織しました。

## 栗山町教育行政執行方針

### 青少年の健全育成

自然教育については、栗山の特色あるファープルの森や里山自然などのふれあいや共生をめざした環境保全の意義を考え、環境問題に関する多様な知識や技能の普及に努める。さらに多くの自然関係団体と連携し、自然環境を守り育てる心の涵養、自然から学ぶ生きる力など子どもから大人まで心温まるふるさとの自然学習の向上に努める。

## 栗山町立継立小学校の実践

### 研究主題

自ら考え、課題を持ち、ねばり強く取り組む子の育成  
-地域の教育力を生かす協力機関との連携のあり方と指導計画の改善-

#### 1 主題設定の理由（概略）

本校では、稲作を中心とした体験的な環境学習を進めている。このような学習を進めるにあたっては、家庭や地域の人材・施設、様々な地域活動と連携を図る必要がある。

そこで、学習への協力者が事前に打ち合せを行なう『体験学習推進協力者会議』を開催することによって、互いの目的を達成しつつ、学校が主体となって特色ある教育活動を展開したいと考えた。

#### 2 研究仮説

・稲作中心の指導計画を体験学習と環境調査学習のように複線化することにより、子どもたちが自ら課題を見つけ主体的に判断し意欲的に課題を解決する活動を展開することができるであろう。

・学校が主体性を発揮して体験学習協力者会議を開き、互いのねらいを明確にすることによって積極的に地域の教育力を活用することができるであろう。

#### 3 研究内容

##### (1) 魅力ある体験学習の展開

###### 環境体験学習のねらい

・自分を取りまく《人・もの・こと》とのふれあいを通して、環境や社会のしくみ、人々へのかかわり方や生き方への関心を高め、自ら課題を見つける力をはぐ

くむ。

・年間学習計画（略）

協力機関との連携の在り方

- ・学習のねらいを明確にするための打ち合わせ会
- ・学校に対する客観的な評価を得る連携

#### 4 成果と課題

体験学習推進協力者会議を開催して、各専門家の協力の在り方を明らかにしたことにより、児童のいろいろな課題に対しての支援が可能となり、児童の興味・関心に広がりが見えたり、教師自身も、学習活動に対して新たな視点を発見したり、より広い視野で計画することができるなど、体験学習の充実を図ることができた。

今後、協力者会議の持ち方等、協力機関との連携の在り方をさらに工夫する必要がある。

また、学年の発達段階に応じた課題や目標設定の仕方について研究を深めていく必要がある。

栗山町立継立小学校・夕張郡栗山町継立191-1 01237-6-3151

### 豊かな自然に囲まれた小学校のピオトープ

- 岩見沢市立メープル小学校

当校では、『冒険活動教育』として、カヌー体験（作る場所から）やキャンプを実施している。校内研修の中で校長はカヌー体験について、「それぞれが手がけた作業が実を結んで、目標とするものが作りあげられる。過程も結果も成就感を満足させるのに余りある」「水に浮いたときの喜び、1人乗り2人乗り...」「とうとう学級の全員が一体となって乗ることができた。この感動」「自分の力でなし得たという自信は、次への挑戦につながるでしょう」「こうしたステージを用意して仕上げた教師側の柔軟な発想が何よりよかったです」と講評している。

これらの発展として、教諭等による『ピオトープ』構想が持ち上がった。

『ピオトープで自然の復元へ』

（北海道新聞 03年11月26日）

同小では10月下旬、雪が降る前にピオトープづくりを進めようと、地域の人の協力を得ながら重機を使って池を掘る作業を始めた。今月19日には水辺に石を並べたり、池の底に砂利を敷く作業に、児童が初めて参加した。

「教材に使えるような池がほしい」と、同小で構想が持ち上がったのは3年前。教諭等は昨年11月から、北海道技術コンサルタントの土屋尚さんを交えて勉強会を重ね、6月には全校児童を対象に「どんなピオトープがいいか」というアンケート調査を行なった。

計画案は、児童の意見をもとにまとめた。中心部の池の大きさを、35人の児童全員が手をつないで作っ

た輪の大きさに決め、植生に変化をつける...(中略)  
土屋さんの、「自然に生息しない生き物を飼うことは本筋を外れる」との見解から、地域のお年寄りに、かつて目にした生き物や植物を聞くことにした。

人間の力で変化させてきた自然を、子どもたちが用意した環境でどのくらい復元できるか。児童を交えて本格的に始まる来年春からの取り組みが楽しみだ。

メープル小学校ビオトープW.S. 03.2.25.

参加者:本校全職員 河川事務所職員7名 コンサルタント

## 1 ビオトープの目的, 意義

### 1.1 生物多様性の減少に対する対応策として

- 一般的で基本的な重要事項
- 他発的?
  - ・ トップダウン的な感覚~目標として捉えたくない
  - ・ 計画段階や評価の軸としては重要

### 1.2 身近な自然の創出と継承

- 自然を楽しむ
  - ・ 自然から「受け取る」こと
- 自然に関わる
  - ・ 自身を自然へ「与える」こと
- 自発的
  - ・ 個々の発想や願いからのボトムアップ
  - ・ 学校ビオトープとしての価値

## 2 ビオトープの成立

- ・ 生物的に多様であり持続的であること
- ・ 自然との触れ合いがあること
- ・ 自然を軸にしたコミュニティがあること

## 3 具体化

### 3.1 水辺の創出

- ・ 技術的には, この「水辺」が最も困難? ~現状では供給水量に不安が残る
- ・ 候補地/規模 ・ 機械力の利用 ・ 給水の計画

### 3.2 地域生態系の把握と動植物の導入

- ・ 近隣地からの表土導入による初期化
- ・ 調査の実施(専門的な調査)と生態系モデルの構築

### 3.3 学校の取り組みとワークショップ開催

- ・ 造園的な作業 ・ 自然観察会の実施 ・ 地域交流会
- ・ モニタリング ・ 情報発信

岩見沢市立メープル小学校 岩見沢市上志文町107 01237-6-3151

## まとめ

### 1 環境教育を進めるにあたっての校長の役割

2004年2月14日、財団法人日本生態系協会主催の『全国学校ビオトープ・コンクール発表会』に参加し、遅ればせながら、日本環境教育学会、日本ビオトープ協会、

日本ビオトープ管理士会の存在を知った。受賞ノミネート校のほとんどはこれらシンクタンクと何らかの関わり合いがあった。

環境教育を進めるにあたっては、これら専門家とのプロジェクトを組むことが必須と感じ取った。

校長は、環境教育に必要な要素を、系統立て、組織化する立場にあると考え、「校長はコーディネーター」と表現した。

## 2 コーディネーターとしての手順

### 学校設置者(自治体)の意向をくみ取る

由仁町が国土交通省の『手作りふるさと賞』を受賞したことから、町長のタウンビジョンを知ることとなったが、これは、由仁町総合振興計画第1節「明日のための人を育てる」の「郷土学習等」に反映されている。

学校教育に具現化されるためには、栗山町の教育行政執行方針に見られるような、教育委員会としての姿勢が明確にされる必要があるだろう。

### 専門家の参画を図る

ビオトープ作りに取り組んでいるメープル小学校は、以前から、北海道教育大学と共同研究の体制をとっている。それにビオトープの専門家が加わり、ワークショップを重ね、教育計画の確立を図った。

栗山町八サンベツ里山計画実行委員会は、栗山町内ばかりでなく、近隣の学校の学習の場を整備し提供しているといえる。

### 地域の協力を得る

メープル小学校のビオトープづくりには、地域の方々か意気に感じ、重機を持ち込むなど労力を提供してくれた。

八サンベツ里山構想には、行政からの多額な予算付けがなされた。

### 児童に学ぶ喜びとふるさとの良さをしみ込ませる

継立小学校の実践ばかりでなく、教育計画の中に、必ず自分がいて、学ぶこと体験することの喜びを得る機会を設定している。

## 3 本校での試行

「専門家の参画」「地域の協力」こそが、『開かれた学校づくり』を進める効果的な手段と考える。ゲストとしてではなく、一分野であったとしても学校教育推進者の一員となったことにより、外部に学校を知ってもらう大きな役割を果たしてもらった経験がある。

本校では、以前より米づくりを体験学習として取り入れているが、今年は、農協青年部や土地改良区職員にお願いし、作業指導や資材提供の範囲を越えて、学校と共に教育を創り上げていく立場をとっていただくことをお願いしている。このことが、地域連携型の学校運営につながるものと確信している。